

## ソポクレス『アンティゴネー』研究

### —『アンティゴネー』における「神々への務め」について—

秋山佳子

本論考では、ソポクレスの悲劇『アンティゴネー』をとりあげる。『アンティゴネー』では、死者の埋葬をきっかけに、神や運命と対峙する人間の姿が描かれている。劇の前半部では、神の掟を重視するアンティゴネーと国の掟を遵守しようとするクレオンとが激しく対立する。後半部では、アンティゴネーの嘆きとその自殺、予言者テイレシアスが述べたとおりの悲劇がクレオンに起こる様子が描かれている。劇の前半部においてきわ立っていた神の掟と国の掟の対立は、後半部ではクレオンとアンティゴネーがともに神という存在と向き合い、それぞれが自らの行動・心情への代償を支払うという点へと変化している。このことは、悲劇『アンティゴネー』の軸が前半部の神の掟と国の掟の対立から、神と人間の関係というテーマへと展開していることを示していると思われる。ここで重要なことは、詩人が、アンティゴネーとクレオンに共通するものがあるとみていること、人間と神の関係性のなかで「神々への務め」を強調していることである。詩人の主張する人間と神との関係性については、劇の後半部分におけるアンティゴネーと合唱隊（コロス）、クレオンなどの会話から読みとることができ、悲劇の中でとくに重要な要素であると考えられる。

本論考の目的は、劇の後半部分を重点的に考察し、主として「思慮（プロネーシス）」という概念に焦点をあてることで、詩人ソポクレスにおける神観・人間観を明らかにすることにある。まず『アンティゴネー』に関する代表的な先行研究を検討し、悲劇において重要な意味をもつ、第一コンモスのコロスの「嘲り」がもつ意味を重点的に考察する。この考察をもとに「神々への務め」という観点からみた「思慮」というのは何かを探っていく。

まず、三名の代表的な先行研究者たちの『アンティゴネー』解釈について検討しよう。

川島重成『ギリシア悲劇 神々と人間、愛と死』（1999年）は、死すべき人間が神と相対することや、第一コンモス中のアンティゴネーへのコロスの「嘲り」に対して問題をなげかけながら

も、その探求を行っていない。そのため、悲劇の後半部分における場面の展開をどのように解釈するかという点においての考察が不十分であるように思われる。

橋本隆夫『『アンティゴネ』とクレオン悲劇』（1973年）は、物語の伝承史研究という観点②立って『アンティゴネー』解釈を試みたものである。橋本氏によれば、神話伝承においては無意味な死をとげたとされているアンティゴネーに何らかの意味を持たせるために、両者の対立構図が作られたとされている。その上で、橋本氏は、神話伝承においても悲劇においても、この人物はクレオンに比肩しないという一貫した考え方に立っている。このように、氏の解釈は、神話の伝承史に軸足を置いているため、劇展開それ自体に即した内面的な解釈の試みとしては、問題を含んでいるとも言える。たとえば、アンティゴネーの悲劇的な性格を重視しながら、その考察を行っていないことなどが課題として指摘できる。

丹下和彦『ギリシア悲劇 人間の深奥を見る』（2008年）は、アンティゴネーを生への執着を残した、人間らしい存在として登場すると解釈している。丹下氏によれば、アンティゴネーの死は、彼女自身の抱いていた死への願望が大きな要因であるとされている。けれども、このようないかにも人間らしいアンティゴネー像の解釈は氏自身の描くイメージに依存しているところが大きく、アンティゴネー解釈としては、いささか説得力を欠いている。

先行研究者たちの『アンティゴネー』解釈は、アンティゴネーは基本的に正しい存在であるという視点に立っていることがわかる。けれども、アンティゴネーが正しい存在であるという視点だけでは、劇の後半部分におけるアンティゴネーの言動や死の原因について、かならずしも一貫した解釈が成り立たない難点がある。以上のことから、神の法を行動原理とするアンティゴネー自身にコロスに嘲笑される原因、つまり、人間として何らかの負の部分・罪がある考えることができるとしたら、アンティゴネーに対するコロスの「嘲り」には、神の存在が大きくかかわっているのではないか。先行研究の検討をとおして、第一コンモス中のアンティゴネーへのコロスの「嘲り」が、悲劇『アンティゴネー』を解釈する上で鍵になるだろう。

このような前提に立って、第一コンモス中のコロスのアンティゴネーへの「嘲り」について、以下でくわしく検討したい。

第一コンモス中には、アンティゴネーが神の親族であるニオベーと自分が同じ運命を授かったと述べている個所がある。コロスはアンティゴネーの言葉に対して「大それたこと」(メガ)という言葉返している。つまり、コロスの意見では、アンティゴネーが神の親族と同じ運命を授かったというのは「思い上がった、驕り高ぶったものである」というわけである。以上のような応答は、第一コンモスの直前の第三スタシモンまでの、アンティゴネーに対して同情的であったコロスの態度とは対照的である。

コロスの言葉に対して、アンティゴネーは、コロスが自分自身を侮辱していると言う。ここでアンティゴネーは「ヒュブリゼイス」という言葉を用いている。この語は「傲慢なふるまいをする」という意味である。不死なる神々と自分を同列にあつかったとして、コロスにその傲慢さを指摘されたアンティゴネーが、コロスが自分に対して「傲慢なふるまい」をしていると非難するのである。コロスのアンティゴネーへの「嘲り」の背後には、アンティゴネー自身の傲慢さへの非難がこめられており、アンティゴネーがコロスに「傲慢なふるまいをしている」と述べることで、かえって、アンティゴネー自身の傲慢さが露呈していると考えられるのではないかと。神々と人を同列にあつかったアンティゴネーの驕りこそ、彼女の悲劇の原因であり、劇の後半部分における主軸の移動を読みとくための鍵であると思われる。

以上の前提に立つと、彼女の死の原因についても明確な説明が可能になる。それは、死すべき人間にすぎないアンティゴネーが、不死なる神々の親族と同じ運命を授かったと主張したことである。アンティゴネーの罪は、神と人間との関係性という視点に立った場合に、はじめて明確化するように思われる。第一コンモス中のアンティゴネーの嘆きや、コロスのアンティゴネーへの「嘲り」は、アンティゴネーの傲慢さという視点で一貫して読み解くことができるのではないかと。ソポクレスによれば、神とは不死なる存在であり、人間を超越したものであるとして、死すべき種族にすぎない人間が不死なる神と等しい運命を授かることは、そのように主張することすら、許されないとされているのである。このことから、アンティゴネーもクレオンもともに神の領分を侵したという点において共通しており、両者に決定的に欠けていたものは「思慮」ではないかとみることができる。

第二コンモスにおいて、コロスは、神に関することには背いてはいけないと述べ、人間が過度

に驕り高ぶることの恐ろしさについて語る。つづいて、人間の「思慮」(プロネイン)が「幸福」(エウダイモニア)の基本条件であるということを強調している。このことから、人間における「神々への務め」とは過度に驕らないことだということが明らかになる。『アンティゴネー』においては、クレオンもアンティゴネーも、ともに過度に驕るという罪を犯したと考えられる。

『アンティゴネー』解釈において「思慮」を重視するという立場は、先行研究においてすでに存在している(柳沼、黒田)。アンティゴネーとクレオンがともに過度に驕るという罪を犯したとすると、両者に決定的に欠けているものは「思慮」であるということになるだろう。「思慮」とおとした場合「傲慢にならないこと」こそ「神への配慮」であるということができるのである。アンティゴネーとクレオンは、劇中においては、激しく対立しているように見えながら、実は、二人ともに同じ過ちを犯しているのである。劇の後半部分における両者の姿には、詩人が強調する人間の「思慮」という面が顕在化していると考えられる。

このようにみると、ソポクレスは、クレオンだけでなく、アンティゴネーもまた、驕りという罪を犯したものとして描いていると言えるのではないか。第一コンモスには、アンティゴネーが自分から冥府に行こうとしているとコロスが語る場面がある。コロスは、アンティゴネーの行動について「自分自身の法のもとにある」(アウトノモス)という言葉を使用している。つまり、コロスは、アンティゴネーが神の掟にしたがったと言いながら、実は「自分自身の法」を行動の原理として、死におもむいたと述べているのである。一見すると、神の掟を守っているかのように見えるアンティゴネーの中に、ソポクレスは、人間としての傲慢さを露呈させることで、人間が自らの中に内包する悲劇性を表現しているのではないかと考えられる。

アンティゴネーとクレオンの両者については、劇の前半部分では、激しく対立しながら、後半部分においては、むしろ両者の共通性に焦点がうつっている。後半部分において、両者が神々に対して代償を支払う姿には、人間の「思慮」の重要性が表現されているのではないか。つまり、過度に思い上がらないことこそ、人間としての「神々への務め」であり、それは「思慮」の働きによって、はじめて可能となる。ここには、人間の「思慮」の重要性をとおして、ソポクレスの人間という存在への深い洞察がこめられているとみてよい。